

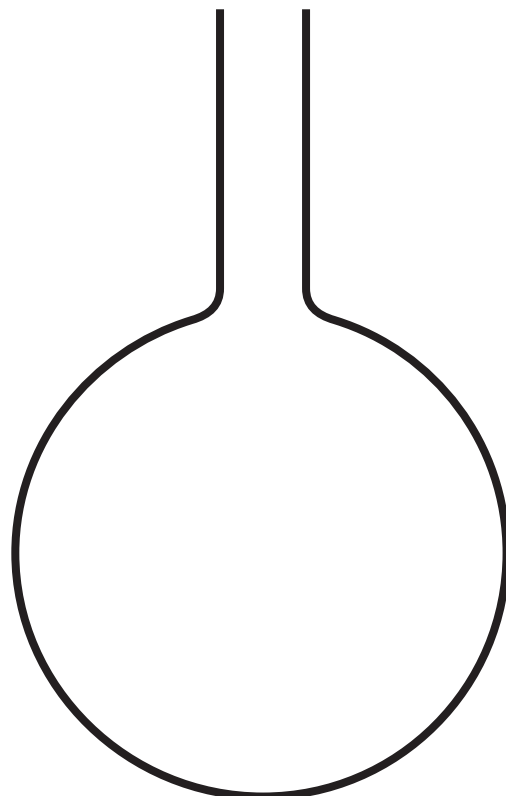
私は、世界は無数の「部屋」の集まりだ  
という発想で世の中を見てみることもある。  
部屋は球状の空間と通路からなり、  
せっけんの泡のように柔らかく色あざやかで  
絶えず生滅している。

私たちはそれらの部屋をさまよっている。  
理由はわからない。

考え方の似ている相手とは、似た部屋もしくは  
同じ部屋にいるのだと考える。  
目の前にいる誰かを「遠く」感じるのも、  
魂が遠い部屋にいるためだと。

ときどき頭の中のかげらがピタリと噛み合い、  
なにかが（わかった）という気分になる。  
新しい部屋に入ったのだ。

けれどバランスはいつしか崩れてしまい、  
私たちは再びさまよっている自分を見い出す。



「部屋」が生滅する世界では  
すべてが生まれつつあり、また死につつあり、  
「存在する」とは、ある状態から別の状態へと常に移行していることを意味する。  
現在という観念が消滅する。

私たちはこの瞬間にも、新しい私たちへと離合集散をくり返し  
そのようにして世界は保たれている。

問題は複雑さの度合いなのであり  
言ってみれば私たちは、  
世界をやみくもに置換する  
パイプのようなもの  
なのかもしれない。

あなたは今  
どんな部屋にいて、  
これからどんな部屋へ  
進もうとしているのだろう。

